

# 担い手被災経験ない若者

東日本大震災の津波で児童・教職員計84人が犠牲になった宮城県石巻市の大川小で、児童の遺族が務めてきた語り部の一部を地元の大学生が担う試みが始まった。遺族の思いや経験を学び、今秋にも来訪者への案内役に立つ。震災から12年がたち、語り手の多様化を模索する中、被災経験のない若い世代が教訓をつなぐ。



大川小遺族と話し合う坂井宏羽さん(右端)ら大学生。7月、宮城県石巻市

## 東日本大震災から12年 教訓つなぐ新たな試み

### 宮城・石巻の大川小 遺族の思い学び準備

「ここはすくもたちが運動会で走り回った場所です。そこにあの日、津波が来しました」。津波の爪痕が残る校舎の前で7月下旬、6年生の次女みずほさん(12)をしくした佐藤敏郎さん(59)が語りかけた。東北大(仙台市)と石巻専修大(石巻市)の学生計5人が真剣な表情でうなずき、メモを取る。

佐藤さんは、6年生の次女真衣さん(12)を失った鈴木典行さん(58)らと2015年に「大川伝承の会」をつくり、それぞれ仕事をこなしながら語り部活動が続けてきた。児童らが50分近く校庭にとどまったこと、裏山ではなく津波がさかのぼってきた川沿いへ逃げたことなどを、1時間以上かけて説明する。「未来の命を守るために」との願いからだ。

ただ語り部の依頼は年々増え、鈴木さんは「平日の申し込みはお断りすることもある」と打ち明ける。最近、来訪者には震災後に生まれた子どももの姿も目立つ。「年が近い世代が話した方が受け止められやすいのでは」とも考えた。

そこで今年2月、以前からイベントの手伝いなどで交流があった東北大のボランティア団体「スクラム」に協力を依頼。石巻専修大の学生にも知人経由で声をかけた。

「大川小の出来事を経験していない自分たちが語っているのか」。打診を受けた学生から、戸惑いの声も漏れた。それでも、さいたま市出身で東北大2年の上園真輝人さん(19)は「来訪者も被災経験のない人がほとんど。同じ立場の自分だからと伝えられることがある」と参加を決めた。

生半可な気持ちではできない。仕事を休むことすら覚悟した。例えは、わが子の遺体を捜し出した当時の状況を話す場面だ。「なんでおめたちがここきいたんだ!」そう叫びながら泥をかき分けたという語り部の沈痛な表情を見て、東北大2年の坂井宏羽さん(19)は「それをどう伝えたらよいか。悩んでいる」と話した。簡単には想像できない情景や感情を、自らの言葉でどう伝えるか。試行錯誤が続く。

佐藤さんは「震災伝承は遺族や被災者だけのものではない」と言い切る。「知らないということは、たくさんの方の話を学べること。そんな世代と一緒に新たな道を切り開きたい」。学生たちは自主的な勉強会や伝承の会との打ち合わせを重ね、9月にも来訪者の案内を始める予定だ。